

愛娘がほぐしてくれた 母への葛藤。

大分教会 上田早紀子さん

上田早紀子さんの母は、若くして前夫と実弟を交通事故で亡くし、子ども二人を連れて再婚した。その亡き人たちの供養と現在の家族の幸せを願い、信仰に打ち込み、同時に家事をこなしていた。上田さんは多忙な母のために、甘えたり泣き言をいわず「しっかり者」に徹していたが、その反動で「私はいつも子どものそばにいる、いい母親になる」という思いを固めていくのだった。そんなとき、上田さんが学ぶ仏教の法要で体験説法のお役を受け、これまでの人生や母への思いを振り返った。「母に対して自分の思いをちゃんと言葉にする」ことは上田さんにとって大きな壁だったが、この説法のなかでようやくその壁を乗り越えることができたのだ。その後、誕生した娘がさらに母との関係をほぐす存在となる。「娘のおかげで、素直に母に甘える練習をさせてもらっているんです」といって、上田さんは愛娘をそっと抱き寄せた。



なぜ、反省が必要なのか

先の東京オリンピックでは、「自分に足りない部分を見定めて、さらに上をめざします」といった敗者のコメントにも胸を打たれましたが、人生において反省が向上と一つのものであることがわかります。

ただ、反省したり懺悔したりしたことが守れずに、失敗と後悔を繰り返すことがあるのも人生です。そのなかで、「懺悔したからには、絶対に同じ過ちをおかしてはならない」と窮屈に考えると息苦しくなります。反省を生かそうと努めることは大切ですが、そのことにとらわれすぎると、思うようにできない自分や人を責めることにもなりかねません。

法華経の教えを実践していく上で必要なこととして、懺悔をテーマとする仏説観普賢菩薩行法経には、「煩惱をすつかり断ち切つていなくても、けつして煩惱に溺れないこと。菩薩の行ないはそれが大切です」とあります。いいところも悪いところも含めて、神仏の前に自分のありのままをさらけだすと、心が洗われます。そうしてまた、再始動すればいいのです。その反省や懺悔が精進の歩みを支える杖となつて、少しずつ人間の成長していくのです。

立正佼成会